

## 海から海を学ぶ 01 「カヌーによる海洋教育の話」

このコラム、タイトルは「海から海を学ぶ」である。実をいうと、海のことを学ぶには、海へ出て、海から学ぶしか方法がないので、そのことを伝えるコラムである。いくら机上で海を学んだとしても、決して学びにはならない。知識は増えるだろうが、それで海を学んだことにはならない。海の学習はそこが実に難しい。

かつて、船乗りになるには「シーマンシップの涵養」が必要だといわれていた（今もそうかもしれない）。涵養とは水が自然にしみこむように、少しずつ養い育てること。つまり海を学ぶには時間がかかるということ。しかも実際に海に出て学ぶことが必要だ。

今の日本社会では、海洋教育がほとんど行われていない。文科省の教育指導要領では海を学ぶよう指導することになってはいるが、海を学ぶには、海から学ぶ必要があるけど、海へ出る手段はなかなかないし、教える先生もいない。磯や浜辺で学ぶこともあろうが、磯や浜辺は陸であり、海でもない。海際であり渚である。泳いで海へ出ることはできるが、それほど距離は泳げないし、沖まで泳いでいくと、リスクは当然高くなる。教育には不向きだ。

そんな海を学ぶジレンマの中、最適の方法がある。それがカヌーを使った教育だ。私はカヌーの専門家なので、カヌーによる海洋教育もやっており、そんな話をここでしたいわけである。

本来、カヌーとは丸木舟のことだ。日本列島は、少なくとも1万年以上前からカヌーがあったところ。ひょっとすると、もっと前の旧石器時代（4万年ほど前）からあった可能性もある。何しろ日本列島に来るには海を渡る必要があるから。海を渡るにはカヌーが必要だし、それより原始的なウォータークラフト（水上具）だったかもしれないが、泳いではまず来られない。4万年前の旧石器時代だって、日本は大陸から離れた島だった。

ということで、このコラムは、カヌーによって海から海を学ぶことについて、色々考えることになる。ちなみに、今のカヌーは丸木ではなく、ほとんどがプラスチックで作られている。

カヌーを教育に使うことは、小規模ながら全国各地で行なわれている。カヌーは、パドルと呼ばれる櫂（かい）を使って漕ぐ。そう、手漕ぎの舟がカヌー。オールと呼ばれる櫂（櫓とも書く）で漕ぐ舟は後ろ向きで漕ぐけど、パドルを使うカヌーは前を向いて漕ぐ。後ろ向きで漕ぐのは過去を見ている。前を向いて漕ぐのは未来を見ている。といった言い方もある。カヌーは未来を見る舟でもあるわけだ。カヌーは、前向きなのだ。

アメリカでは、カヌーによる教育が、もう100年も前から行われている。アメリカのカヌー人口は5,000万人ともいわれ、アメリカ人のほとんどは子供の時からカヌーを漕いだ経験を持っている。そんな事実は日本ではあまり知られていない。

アメリカCIA（中央情報局）のワールドファクトブックによると、アメリカの海岸線は日本の海岸線より短いんだけど、アメリカには内水面が非常に多く、彼らの多くは穏やかな内水面でカヌーを漕いでいる。日本にはそれほど内水面がないため、海へ出ていくことになるという風土の違いがある。そんな日本で、海から海を学ぶために、このコラムはカヌー教育の意義を伝えていくことになるんだろうな、多分。

ということで、第1回目は、このへんで。